

リーディング授業での国際理解と意識変化について

ロン 美香

Fostering Global Awareness through Culture-Based Studies in Language Classrooms

RON Mika

Abstract

This paper explores how a language course that combines cross-cultural studies can possibly impact Japanese university students' attitudes towards foreign cultures. The data were collected at a university in Tokyo over a period of 15 weeks. Alongside regular lessons, students individually explored various global themes to promote their understanding of cultural diversity. The results of in-class surveys indicate that many students were exclusively Japan oriented at the beginning of the semester. However at the end of the semester, most students learned to appreciate cultures that are significantly different from their own. Incorporating cross-cultural activities in a language class conforms with MEXT's educational policy of developing "Global Talent," and are strongly encouraged.

I. はじめに

政府がグローバル人材の育成に力を入れ始めてから10年近く経った。産学連携によるグローバル人材育成推進会議（文科省、2011）は日本人としてのアイデンティティを持ちながら異文化理解ができ、コミュニケーション能力と教養・専門性・リーダーシップなどを兼ね揃えている人こそがグローバル人材であると定義している。このような人材を育成するべく多くの大学は海外大学と交流協定を結び学生の交流を活性化しているが、文科省（2019）の報道発表によると2017年の日本人海外留学者数は105,301人であり、総務省統計局（2019）が公表している2017年度の大学生総数に照らし合わせるとわずか4%にしか及ばない。これは両角（2011）のグローバル人材育成には学生の海外送出国がより

重要であるという見解に反している。理由として内向き志向の学生の多さが関連しているようだ。小島（2014）の分析結果によると内向きな学生は留学先での生活や対人関係、語学力、海外大学の教育レベルの高さに不安を感じていたと指摘している。またベネッセ教育総合研究所（2016）の調査で大学生が留学しない理由の4割近くは「海外生活に不安を感じる」「語学力に自信がない」「海外に興味がない」ためであると報告されている。さらに産業能率大学（2017）の「新入社員のグローバル意識調査」によると3年前と比較して3ポイントほど下がったものの、依然6割を超える社会人が海外転勤を希望しないと回答していることが分かった。吉田（2014）はこの状況について、大学こそができる特化した役割を提供すべきと提起している。更に世界をリードできるような人材を育成するためには「グローバルな問題を他国の学生と議論できるような英語教育が必要」だとも唱えている。

コミュニケーション力や語学力は試験で測定できるが、グローバル人材育成で求められている異文化理解はどのように計れば良いのであろう。Hett(1993)はグローバルコミュニティーと繋がることで責任感を持つというその世界観こそがGlobal mindednessであると定義している。またGlobal mindednessには5つの側面があると述べている。

- | | | |
|---|--------------------|--|
| 1 | Responsibility | 世界の人々の状態を改善してあげたいというモラル的責任感 |
| 2 | Cultural pluralism | 多様な世界文化の価値を認め互いに価値あるものを提供できると考え、学ぼうとする意欲 |
| 3 | Efficacy | 個人行動が本国及び国際社会に影響を及ぼすことができるという意識 |
| 4 | Globalcentrism | 自国の利益だけでなくグローバルコミュニティー全体への利益は何かと考える探求心 |
| 5 | Interconnectedness | 世界の人々を身近に感じ繋がることで、一つの家族と捉えようとする事 |

このうちCultural pluralismとInterconnectednessは本研究との関連性があるとみて被験者の意識変化を測る際に参考にした。海外経験がほぼ皆無の大学生が、留学生との交流が限られている国内で、どのようなグローバル意識を持つ

て大学に入学しているのか本研究で調査する。また大学での異文化学習を通して学生の意識にどのような変化が生じるのか検証し報告する。

II. 調査について

1. 被験者

本研究は都内の私立大学で2017年に英語リーディング科目を選択受講した1年生（n=76）を調査した。アンケート回答を辞退した者を除外し対象学生は72名であった。そのうち海外（オーストラリア、アメリカ、カナダ）での英語学習経験者は9名（12.5%）だったが全員3週間未満の短期滞在であった。

2. 期間

研究調査期間は15週間だった。

3. 調査方法

第1週に自己紹介アンケート（付録A参照）で英語力・留学経験・異文化に対する興味の有無などについて尋ねた。このアンケートには他の項目も含まれていたが、今回の分析に用いたもの以外は省略した。また第1週にグローバル意識調査として興味のある地域（国）とない地域について自由記述してもらい理由を分析した。

第2週より授業で、オーストラリア、インドネシア、中国、アルゼンチン、メキシコ、シンガポールの文化や民族、野生動物の生態、遺跡や建造物、歴史についてテキストを用いながら学ばせた。この科目の学習目標は異文化理解、英語読解力と語彙力の強化、リーディング・ストラテジーの習得と4技能の伸長であった。

第7週より応用として筆者が異文化理解プロジェクトを課題に追加した。具体的には授業で扱わなかった国を各自希望選択させ、英語文献や政府HPなどを基にワークシートに歴史・言語・文化・自然環境・資源・法律・宗教などの情報を書き込ませた。その後A3用紙にリサーチ内容を英語でまとめさせた。ポスターセッション（付録B参照）を第13・14週にさせることでクラス全体に情報共有してもらった。

第15週には「国際理解とは何か」というテーマで意見を記述させたほか、学習を通して興味を持つ地域が変化したのか再調査した。今まで興味を持っていなかった地域に対する意識についても変化があったのか理由と共に述べても

らった。またHettのGlobal Mindedness Indexを参考に、項目Ⅱ（付録A参照）を作成し、第1週と15週に実施して結果を検証した。アンケートで得られた情報は研究目的以外に用いることはなく、回答を辞退しても不利益を被ることはないと伝えた。そして学期初めに配布した自己紹介アンケート以外は全て無記名で実施した。

Ⅲ. 調査結果

1. 学期初めの傾向について

自己紹介アンケート項目Ⅰの集計から（表1参照）被験者はどちらかと言えばWritingよりReadingを好んでいることが伺えた。また英語が「好き」と答えた学生は32%で、その倍以上の68%は「好きでない」「どちらともいえない」と回答した。次に外国文化やその習慣について「興味がある」人は54%であった。逆に「興味がない」と答えた割合は17%、「どちらともいえない」は29%だった。異文化理解を主体とした英語クラスを選択履修しているにも関わらず英語や外国に関心が薄い内向的な学生が半数を占めているのは意外であった。

表1 自己紹介アンケート項目Ⅰ (n=72)

項目	はい	いいえ	どちらでもない
読書が好き	47%	24%	29%
書くことが好き	21%	37%	42%
英語が好き	32%	22%	46%
外国文化や習慣に興味がある	54%	17%	29%

興味のある地域とない地域についても回答を整理した。有効アンケート回収数は72だったが自由記述で複数回答もあったため国数と回収アンケート数は一致していない。

表2に示した通り、学生にとって興味のある地域は昇降順にヨーロッパ(56%)、アジア(16%)、オセアニア(7%)、北米(6%)、アフリカ・中東・南米・全世界(各3%)、南極(2%)、中米(1%)、なし(2%)であった(注:割合は四捨五入して表示)。興味を持っている理由については半数以上が「文化」と答えた(表2・3参照)。ただし、ヨーロッパでは西洋文化への「憧れ」が中心だったのに対し、アジアでは日本文化との「違い」に興味を示していたの

が特徴的であった。そして「福祉」は唯一ヨーロッパだけがランクインしていることも興味深かった。全体的にはメディアで特集が組まれたり日本人観光客が多い地域に興味を抱いているようだった。また表2の欄外に載せたが2名は「海外に興味なし」と答えていた。その理由は日本が最高だからであった。

表2 興味のある地域ランキングとその理由（第1週）

地域	%	理由	%
1 ヨーロッパ	56.0	1 文化	53.0
2 アジア	15.5	2 雰囲気	13.9
3 オセアニア	6.9	3 自然	8.7
4 北米	6.0	4 日本との関わり	7.0
5 アフリカ	3.4	5 歴史	6.1
6 中東・南米・全世界	2.6	6 福祉	4.3
9 南極	1.7	7 有名人	3.5
10 中米	0.9	8 治安	2.6
なし	1.7	9 宗教への興味	0.9

表3 興味がある地域と理由の内訳

	欧州	アジア	大洋州	北米	アフリカ	中東	南米	全世界	南極	中米	なし
文化	42	9	1	3	1	1	1	3			
雰囲気	7	3	3	1			1			1	
自然	1		3	1	2		1		2		
日本との関わり	1	3	1	2		1					
歴史	6	1									
福祉	5										
有名人	2	2									
治安	1				1						
宗教への興味						1					
日本が最高だから											2

次に興味のない地域についてだが、最も多く選ばれたのが中東で31.1%に上った。続いてアフリカを21.6%が選択した。興味のない理由として治安や衛生が挙げられると予想していたが、実際にはそれ以上に「良く分からないから」という意見が多く寄せられた。

表4 興味のない地域ランキングとその理由（第1週）

地域	%	理由	%
1 中東	31.1	1 知らない	39.2
2 アフリカ	21.6	2 治安	18.9
3 アジア	16.2	3 日本と変わらない	13.5
4 南米	10.8	4 悲しいイメージ・文化	5.4
5 オセアニア	4.1	5 観光地がない・宗教	2.7
6 北米	2.7	6 遠い	1.4
7 ヨーロッパ・中米	1.4		
特になし	10.8		

表5 興味のない理由の内訳

	中東	アフリカ	アジア	南米	なし	大洋州	北米	欧州	中米
知らない・話題に出ない	14	6		4		3	1		1
治安の悪さ	6	3	1	4					
日本と変わらない			9				1		
イメージ(悲しくなる)	1	2	1						
文化		3						1	
観光する場所がない		1	1						
宗教への恐怖	2								
距離が遠い		1							
全てに興味あり					8				

つまりヨーロッパやアジアは身近で情報も多いゆえにどのような場所か想像できるが、中東やアフリカは自ら率先して情報収集をしないため興味も湧かないということであろう。逆にアジアに関しては身近すぎて日本との違いが無さそうだから興味がないという回答が多く占めたため、一概に身近であれば興味が湧くという訳でもないことが判明した。特に日本はアジアに属し東アジア人と外見が似ているだけでなく、歴史的にも共有する部分が多いため一絡げに「日本と変わらない文化」と誤解されているようだった。興味の無い地域は無いと答えた学生8名(10.8%)は、その理由として「世界を知りたい」「良い意味でも悪い意味でも興味がある」と述べていた。

2. 異文化理解プロジェクトについて

第7週より開始した異文化プロジェクトでは、自由な環境で学生に学んでもらうために国はあえて指定制にせず自由選択制にした。この方法は思った以上に効果的で実に多岐に渡る国が選ばれた。ヨーロッパを担当した学生数は32名でルーマニア、スウェーデン、ポルトガル、ロシア、クロアチア、フランス、デンマーク、ベルギー、イタリア、スイス、スペイン、オランダ、ドイツ、アイスランド、イギリス、スコットランド、チェコ、ノルウェー、オーストリア、キプロス、トルコが選ばれた。次にアジア担当は14名で、香港、台湾、タイ、韓国、インド、モンゴル、ベトナムが選ばれた。被験者の4分の1が「興味なし」と答えていたアフリカは8名が選択しエジプト、マダガスカル、タンザニア、ガーナ、エチオピア、モロッコを調べた。北米は5名が希望したがアメリカよりカナダの方が多かった。そして学期初めに最も興味が示されなかった中東は6名が立候補してアラブ首長国連邦、イラン、サウジアラビアをリサーチした。太平洋地域はニュージーランド、パプアニューギニア、フィジーを4名が、その他の地域では南米ペルー、チリ、エクアドルを3名が選んだ。クラス内では各自違う国を担当していたが、複数クラスからデータを取っているため重複して選択された国もあった。学生は様々な資料を持ってきては授業で学んだリーディングストラテジーを活用しながらWriting活動を行っていた。

学生のワークシートメモ（記述は原本と同じ）

<p>学生A Tanzania is located at the south-east of the African continent. Serengeti National Park is one of the best known National Parks in Africa. This was registered on World Heritage in 1981. Serengeti National Park is savanna which expand on the foot of Kilimanjaro. There are many animals about 300 thousands like lions, elephants, giraffe, and buffalo etc.</p>	<p>学生B Why is it allowed for belly dancer to expose skin to light? Actually, UAE's woman hardly dance belly dance. There are dancer from Turkey, Egypt an Lebanon. In Japan, the belly dance is regarded as a sensual, beautiful dance. But, the position of the belly dancer is low in UAE. Because I think that belly dance is a very attractive and cultural dance. I think that the belly dancer should have a pride.</p>
--	---

学期初めに興味があった地域とプロジェクトに選んだ国を照らし合わせてみると、同じ地域を選択した学生は26%に留まったのに対し、74%は異なる地域を選んでいて。このことから徐々にグローバルな関心を持ち始めたと推測される。

3. 最終的な傾向について

第15週に「興味のある地域」について被験者72名に再度記述してもらい、第1週に行ったアンケート結果と比較すると表6のように変化した。やはり全体的にはヨーロッパに対して根強い支持があったのは否めないが、実際のポイントでは約12も減少していた。これ以外にポイントが減少した地域はアジア、北米、南米、南極であった。反対に支持が増えたのは全世界の7.5ポイント、次いで中米6.7ポイント、中東3.7ポイント、アフリカ1.7ポイントなどであった。いずれも「興味があまりない」とされていた地域に関心が広がった形跡があり、被験者のグローバル意識に変化が起きたようである。

表6 興味のある地域の比較

第1週		第15週		ポイント変化
	%		%	
1	ヨーロッパ	1	ヨーロッパ	-11.8
2	アジア	2	アジア	-1.6
3	オセアニア	3	全世界	+7.5
4	北米	4	中米	+6.7
5	アフリカ	5	オセアニア	+0.6
6	中東・南米・ 全世界	6	中東	+3.7
9	南極	7	アフリカ	+1.7
10	中米	8	北米	-2.0
	特になし	9	南米	-1.3
		10	南極	-1.7

また最後のアンケート調査で「今まであまり興味を持っていなかった国や地域に対する意識が変わったか。それはなぜだと思うか。」という質問に4段階評価と自由記述で答えてもらった。具体的な国や地域名は特に記述されていなかったのもので、「とても変わった」「少し変わった」「特に変わらなかった」「わからない」の評価を集計して表7に示した。

表7 興味を持っていなかった国や地域に対する意識変化

とても変わった	少し変わった	特に変わらなかった	わからない
88%	10%	1%	1%

意識に非常な変化があったと感じた学生は9割近く達した。その理由については「学ぶ機会があったから興味のない国の良さも理解でき間違ったイメージを払拭できた」とまとめられるようだ。以下に自由記述で寄せられたコメントを一部掲載するが、表現は記述のままにしてある。

「とても変わった」

- 具体的な情報を得たから各国がもっと気になるようになった
- 発表を通して各国の魅力を知ったから
- 知る環境を与えてもらい学んだから
- 普段外国について調べる機会が減多になく授業を通して体験できたから

- わかりやすい英語で詳しく教えてくれたので理解しやすかったから
- 調べることの重要性を学んだ
- 先進国以外も知ることが大切
- 悪いところばかりが目立つ国にもそれぞれの良さがあることが分かった
- 歴史や背景や習慣があってそれを理解することで様々なことが更に面白くなる
- 自分の知らない国にも昔から独自の文化や生活を守ってきたことが見えた
- 特徴はどの国にも存在して唯一無二のものだったから
- 勝手に自分がイメージを作り上げていたがそれがなくなった
- イメージだけでなくその国にも違った面があり良いところをたくさん知ったから

「少し変わった」

- 今までではイメージとしてしか抱いてなかったものも、良いところや変わったところを発見できた
- 良いところが知れた
- 知らない文化や生物など興味を引いたから
- 知らない知識を知ったから

「特に変わらなかった」

- どの国も見るのは初めてで、国で起きることを認識したのみだから

学期初めのアンケート結果（表4参照）でも述べているが異文化や海外に興味
が薄かった理由は機会に恵まれず知識不足であったことに由来しており、授業
やリサーチ、ポスターセッションを通して異文化学習する機会を提供したこと
で被験者のグローバル意識にかなりの変化が生じたようだ。人の持つ「イメ
ージ」は必ずしも正確ではなく、丁寧に調べることや素直に学ぶ大切さに自ら気
づいたのが印象的であった。

次にグローバル意識に関してHett（1993）のアンケート項目であるCultural
pluralism（A）とInterconnectedness（B）から質問を4つずつ選び「4：非常
にそう思う」「3：そう思う」「2：そう思わない」「1：全く思わない」の4
段階で評定してもらった。具体的な項目内容と結果は表8の通りである。

平均値を見ても分かる通り、第1週では「自分はグローバルコミュニテイ

の一員であることはそれほど大切でないと思う」以外の全ての項目で否定的な意見であった。しかし授業で異文化学習した後の認識はかなり変わった。Cultural pluralismでは全ての項目でプラスになり、特に「人を理解する上でその人の持っている文化背景を考えるべきだ」と「日本人は外国文化から価値あるものを学べると思う」が大きく変わっている。これは異文化学習により理解の大切さを認識したからと推測できる。また「大学で異民族・異文化理解を促すプログラムを提供するべきだ」という項目も賛同する学生が多くなっていった。しかし自分が世界市民の一員だと捉えられるほどInterconnectednessにあまり変化は見られなかった。このレベルの共同体意識を身につけるには更に長期間異文化に触れることが必要なのかもしれない。

表8 Global Mindedness Indexの変化

	項目	第1週		第15週	
		M	SD	M	SD
A	1 人を理解する上でその人の持っている文化背景を考えるべきだ	2.62	0.62	3.35	0.57
	2 国の豊かさは国内の異文化・多国籍民の浸透度によって測ることができる	2.78	0.66	3.06	0.67
	3 日本人は外国文化から価値あるものを学べると思う	2.39	0.57	3.53	0.59
	4 大学で異民族・異文化理解を促すプログラムを提供するべきだ	2.96	0.62	3.12	0.49
B	1 自分のことを考える時に1国の市民ではなく世界市民と捉えている	1.69	0.54	2.85	0.61
	2 世界が繋がることで日本に利益があると思う	2.96	0.74	3.08	0.57
	3 世界人類は皆家族だと強く感じる	2.07	0.77	2.25	0.75
	4 自分はグローバルコミュニティの一員であることはそれほど大切でないと思う	2.07	0.50	2.06	0.42

最後に学生に国際理解とは何かと質問した。「異文化を知り理解すること」と回答した人が一番多かったが、1) 異文化や自分との違いを受け入れること、2) 人柄や国民性を理解して人的交流を図ること、3) 異文化の価値観を共有することと述べたものも多数いた。また4) 自己中心的にならず歴史的背景を考慮し互いに認め合うことや5) ニュースに惑わされないこと、更には6) 表

層的な知識を周りに発信しないこと、など情報源に振り回されずしっかり状況を見据えることが必要だと感じ取った学生もいた。また国際理解ができるようになるためには7)自分を深め豊かにすること、8) 自国文化を大切にし互いに協調し尊重すること、9) 言語だけでなく内面的なことも理解することが必要だという回答も寄せられた。

IV. おわりに

大学生は一連の授業を通して異文化について再考できたようだ。今回の授業では語学指導に加えて、背景にある様々な文化にスポットライトを当てた。本研究結果から、スキルベースの科目内に於いてもグローバル・アウェアネスを高める指導は可能であった。更に学生がアクティブに情報収集したことで異文化の大切さを率直に認識し意識変化が現れたのかもしれない。グローバリゼーションに対応できる人材を育成するには今後も多文化社会に関心を持てるような授業を大学が提供していかなければならないだろう。たとえ内向きな学生であっても意識変化が生じるプログラムを提供していくことでグローバル人材を増やすことはできると考える。今後の語学授業でも積極的に異文化理解について学ばせていく重要性が示唆されたといえる。

参考文献

- 小島奈々恵 他 (2014) 「日本人大学生の海外留学に関する意識調査—「内向き志向」と留学意思の関係—」『総合保健科学広島大学保健管理センター研究論文集』、Vol30、pp.21-26
- 産業能率大学 (2017) 「調査報告書：第7回新入社員のグローバル意識調査」 <https://www.sanno.ac.jp/admin/research/global2017.html>
- 総務省統計局 (2019) 第25章教育 25-8 「高等専門学校・短期大学・大学・大学院の学科別学生数」 <https://www.stat.go.jp/data/nihon/25.html>
- 両角亜希子 (2011) 「大学のグローバル人材育成はどこまで進んでいるか」リクルート カレッジマネジメント168 May-Jun
- 文部科学省 (2011) 「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2011/06/01/1301460_1.pdf
- 文部科学省 (2019) 「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afiedfile/2019/01/18/1412692_1.pdf
- 吉田文 (2014) 「グローバル人材の育成と日本の大学教育 —議論のローカリズムをめぐって—」『教育学研究』第81巻 第2号、早稲田大学、pp.28-38

- ベネッセ教育総合研究所 (2016) 「大学生の意識と行動」『第3回 大学生の学習・生活実態調査 ダイジェスト版 2016年』報告書 4-1 留学意向・グローバル意識、pp.16-18
https://berd.benesse.jp/up_images/research/3_daigaku-gakushu-seikatsu_051.pdf
- Goodwin, C. J. (2010). *Tips for Presenting a Poster*. Research in Psychology: Methods and Design. 6Ed. John Wiley & Sons Inc., p.515.
- Hett, E.J. (1993). *The development of an instrument to measure global mindedness*. Doctoral dissertation, University of San Diego.

付録

A：自己紹介アンケート（抜粋）

I 次の質問に答えてください

読書が好き	はい	いいえ	どちらともいえない
文を書くことが好き	はい	いいえ	どちらともいえない
英語が好き	はい	いいえ	どちらともいえない
外国文化や習慣に興味がある	はい	いいえ	どちらともいえない

II 次の質問に4段階で回答してください。

(4：非常にそう思う 3：そう思う 2：そう思わない 1：全く思わない)

Culture pluralism

- 人を理解する上でその人の持っている文化背景を考えるべきだ
- 国の豊かさは国内の異文化・多国籍民の浸透度によって測ることができる
- 日本人は外国文化から価値あるものを学べると思う
- 大学で異民族・異文化理解を促すプログラムを提供するべきだ

Interconnectedness

- 自分のことを考える時に1国の市民ではなく世界市民と捉えている
- 世界が繋がることで日本に利益があると思う
- 世界人類は皆家族だと強く感じる
- 自分はグローバルコミュニティーの一員であることはそれほど大切でないと思う

B : ポスターセッションに関するハンドアウト

Purpose:

The poster sessions will help you learn more about foreign countries and their cultures. Through this activity, you are expected to interact with each presenter in English and obtain much information as possible through communication.

What is a poster session?

In a poster session, a presenter researches one specific country, prepares a poster, and waits for visitors to visit the poster and explain about the topic. The poster sessions usually have a relaxed atmosphere where visitors move around freely and listen to explanations and discuss posters & issues that they are interested in. It is important for the presenter to make visitors interested in the poster.

How do I prepare for a poster session presentation?

After you decide a country, collect information (interesting facts/examples) from the library, internet, and brochures and briefly summarize your findings on a worksheet. Since the format of the poster session is mainly Q&A, you should also think about sample answers to expected questions from the visitors.

What should I include in a poster?

You are required to prepare a poster and include: 1) a title with the name of a country, 2) your name, and 3) references. The rest of the poster will be designed to give visitors information about your topic in a clear and interesting way. You may include keywords, pictures, graphs, tables, a summary of your research, personal experiences and suggestions. Your poster should not contain too much information, but should stimulate your visitors to ask questions.